

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

●冬の生活を楽しんだ 韓国の伝統的木造民家

韓国は初めて海外の建築を見学した国だった。

1988年に開催されたソウルオリンピックの前年で、国が建設ラッシュで沸いていた。

はじめて日本を離れて、外国の生活文化に触れ、ものすごいカルチャーショックを受けた。

日常の人々の立居振舞や生活慣習、都市や地方の雰囲気や町並みなど、日ごろ慣れた日本とは全く異なる世界があることが衝撃であった。

大阪市立大学の梶浦研究室が、韓国の集合住宅を見学するツアーを企画し、関東学院大学の田辺邦男さん達と参加した。

釜山から入国し、貸切バスで韓国内を縦断し、ソウルから帰国した。

オリンピック会場近くでは、単管抱き足場が高層集合住宅群に掛けられ、日本と比べると比較的細い柱・梁架構にコンクリートブロック造の戸壁が積まれていた。地震がなく建物の耐震性に拘らないこの国の割り切り方に驚かされた。

北朝鮮に近いソウルの夜空に防空用サーチライトが一晩中も交差し、正に南北の戦時下にある国に来た緊張感があった。

その後、2回ほど訪韓する機会があった。

2回目は日本に輸入する韓国の石材と、その加工工技術や生産現場を見に行った。

3回目はフローからストックに転換し始めた韓国の建築界からの招待で、日本のリフォーム市場と改修工事の事例を紹介し報告するためであった。

多摩ニュータウン南大沢地区のジャンカだらけの新築工事の欠陥や施工不良の実態を示し、施工不良を修繕・改修技術によりリフォームする努力を示すなどの内容だった。これはある面では日本の新築工事の弱点をさらけ出すものだった。

先方は、日本の先進的リノベーション技術はもっとスマートで夢のある世界を期待していたように思われた。

最も強く感じた韓国の建築文化は、現代建築ではなく、伝統的木造民家とその暮らし方である。

私はアフリカを除く国々の建築を見てきたが、建築遺構は石造やレンガ造が多く、伝統的木造民家と生活様式が残されていたのは韓国だけだった。



炊事場の窯の煙突を床下に回し、快適な冬の住まいを楽しんだ韓国のオンドル生活。

日本の伝統的建築文化は木造建築である。

韓国の気候、風土に根差した伝統的民家は日本の住宅と住まい方と全く異なる様式であった。

韓国の伝統的民家は、夏の暮らし向き用の家と、冬の暮らし向きのための家で構成されている。

夏用の建物は「大庁」と呼ばれ、風が抜ける吹きさらしの板の間である。一方、冬用の建物は窓が少なく、すき間風が入らないよう目張りされた部屋で、床下は台所の窯場の煙突が通されオンドルの床暖房になっている。

一つの敷地に、四季に対応した家屋が配置され、夏冬の生活を快適に過ごせる建築様式である。

奈良時代から鎌倉時代に至るまで日本の建築は大陸から朝鮮半島を通して日本にもたらされた。

だが、日本の家づくりは、冬の寒さに目をつぶり、夏向きに特化してきたのではないだろうか？

夏を旨とする家造りを説いた鴨長明の方丈記はそれを象徴している。

書院造りや数寄屋造りから桂離宮まで、夏を楽しむ家造りに思える。

豪雪地帯の飛騨の合掌造りや東北の古民家まで土間と囲炉裏と四つ間取りの住まいは、厳冬期の生活を楽しく快適に過ごそうとする住まい造りにはなっていない。

はじめて訪韓した季節は冬ではなかった。

同行した田辺邦男さんとオンドルハウスの布団で就寝した。快適な時間を過ごせた。

足の霜焼けや赤切れに耐えながら生活していた日本人の生活と、足裏にぬくもりを感じながら過ごしてきた韓国の民衆の生活文化の違いに思いをはせつつ、大陸から多くの建築技術を学び移入してきた日本の先人は冬の生活の楽しみ方や生活習慣を日本に移入せず、切り捨ててしまったのか、深刻に考えさせられる韓国の旅であった。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。
URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。
建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、40年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。